

# 桓武朝における楼閣附設建築

山田邦和

The Addition of "Rokaku" Structures during the Kammu Era

YAMADA Kunikazu

はじめに

- ① 平安京における楼閣附設建築
- ② その他の都城における類似例
- ③ 中国都城における楼閣附設建築
- ④ 桓武朝における楼閣附設建築採用の意義

## 【論文要旨】

桓武天皇の造営した平安宮においては、殿舎や門の左右に翼廊を延ばし、その先端に楼閣を附設することがしばしば見られた。朝堂院正殿である大極殿、朝堂院南門である応天門、豊楽院正殿である豊楽殿などがその例である。また、最近の調査では、長岡宮においても朝堂院南門が翼廊と楼閣を附設していることが判明した。本稿ではこれらを「楼閣附設建築」と名付け、その意義を考察する。

中国では、隋・唐の都城に楼閣附設建築が造られた。洛陽城の宮城の正門である応天門、長安城大明宮の正殿である含元殿がそれであり、また長安城の宮城の正門である承天門も同じ様式の建築であったと推定する。隋・唐の都城では、楼閣附設建築は皇帝が外部の社会と接する場所（外朝）に採用されたものであった。桓武天皇はそうした中国都城の要素を取り入れることによって、長岡宮や平安宮に楼閣附設建築を築造したと推定する。

## はじめに

### (1) 長岡宮朝堂院南門の楼閣の発見

二〇〇五年一〇月、(財)向日市埋蔵文化財調査センターは、長岡宮朝堂院跡における重要な発見を公表した。長岡宮の朝堂院南門の左右には翼廊が延びていることは従来<sup>(1)</sup>の調査によって明らかになっていたのであるが、今回の調査ではそれに加えて、この朝堂院南門翼廊がL字形に屈曲するとともに、その南端には「楼閣」状の建築物が附属することが確認されたのである(図1)。平安宮の場合、朝堂院の正門である応天門の東西にL字形の翼廊が延び、その先端に翔鸞楼(西側)、栖鳳楼(東側)という楼閣が築かれていたことは従来から知られてきたことである。しかし、今回の発見により、こうした「楼閣」を持つ宮殿建築の存在は平安宮にとどまるものではなく、長岡宮の段階にまで遡ることが明らかとなったのである。

この重要な遺跡については、先般、発掘調査報告書の刊行を見るに至った<sup>(2)</sup>。しかし、その詳しい検討は今後十分な時間をかけておこなうべきであろう。ただ、それに先だって、楼閣を附設する宮殿建築とはどのようなものであったのかを整理しておくことは許されるのではないかと思う。すなわち、長岡宮や平安宮における楼閣建築を通して、桓武天皇がその新しい首都で実現しようとした理想について筆者なりの予察を加えておきたいのである。

### (2) 「楼閣附設建築」の用語

本稿が検討対象とするのは、日本と中国における宮殿の建築の中で、主体となる建物の左右に楼閣を附属させたものである。主体となる建物

が門である場合、こうした附設楼閣は「闕」という文字であらわされており、楼閣を附設する門の全体は「門闕」という用語で呼ばれている。それは、劉熙の『釋名』が「闕、闕也。在門兩旁。中央闕然為道也」と記す通りである<sup>(3)</sup>。もちろん、こうした伝統的な用語を採用するのにあえて異を唱えるわけではない。しかし、本稿では殿舎に楼閣を附属させる建築をも対象としたのであり、その場合には門に附属する楼閣だけを意味する「闕」の用語を使うことは適当ではないであろう。そこで、こうした建物に対して「楼閣附設建築」、そこでの楼閣に「附属楼閣」という仮称を与えておきたいと思う。また、主となる建築物は殿舎である場合と門である場合があるため、前者を「楼閣附設殿舎」、後者を「楼閣附設門」と呼んでおきたい。また、楼閣附設建築には、主体となる建物の左右にそれぞれ平面L字形の翼廊を付けてその先端に附属楼閣を置く場合と、主体となる建物と附属楼閣とが一直線上に並んで建てられる場合とがある。いささかこなれない用語ではあることを承知の上で、前者を「L字形配置」、後者を「I字形配置」と仮称しておきたいと思う。つまり、楼閣附設建築はさらに、L字形配置の楼閣附設門、I字形配置の楼閣附設門、L字形配置の楼閣附設殿舎、I字形配置の楼閣附設殿舎の四種に大別されることになる。そして、長岡宮朝堂院南門は、このうちの「L字形配置の楼閣附設門」にあたることになるのである。

## ① 平安京における楼閣附設建築

### (1) 開放された平安宮大極殿

平安宮朝堂院は、複廊によってとり囲まれている。長岡宮までの都城においては、朝堂院の諸堂と大極殿との間は閤門を持つ東西回廊によって遮断されていた。つまり、この場合、朝堂院の北端が大極殿院という

閉ざされた空間を形づくっていたのである。それに対して、平安宮朝堂院の場合、朝堂院諸堂と大極殿の間は龍尾壇(龍尾道)という段差によって区切られているだけであった。平安宮大極殿がそれ以前の都城と異なっているもうひとつの点は、大極殿の東西に軒廊がとりつき、さらにそれは朝堂院の外郭回廊へと連なっていることである。藤原宮、前期難波宮、後期難波宮、恭仁宮、平城宮の場合、大極殿はまったく独立した建築物であった。長岡宮では、大極殿と大極殿後殿(平安宮における小安殿に相当する建物)との間は廊で結ばれていたけれども、大極殿自体に東西の軒廊がとりつくことはなかった。

平安宮がこうした構造をとった結果、平安宮の大極殿と朝堂院との関係は、他の都城に比べてかなり異なったものとなった。平城宮の場合、天皇はしばしば大極殿前面の閣門に出御して儀式を主宰している。たとえば、「天皇御重閣門、賜宴文武百官并隼人蝦夷」(『続日本紀』和銅三年正月一六日条)、「天皇御大極殿閣門、賜宴於五位已上、宴訖賜禄有差」(『続日本紀』延暦二年正月一六日条)、「饗大隅薩摩隼人等於朝堂、其儀如常、天皇御閣門而臨觀詔進階賜物各有差」(『続日本紀』延暦二年正月二八日条)とある通りである。すなわち、平城宮では大極殿は朝堂院諸堂と隔絶させられていたため、儀式の種類によっては天皇が大極殿を離れ、大極殿院閣門まで出御することが必要だったのである。橋本義則はこうした形式の儀式を「閣門出御型」と呼んでいる<sup>(5)</sup>。

一方、平安宮においては、大極殿は朝堂院諸堂に対して開放されていたし、龍尾壇の壇上は実質的には大極殿の南庭としての機能を果たすことになった。これによって、大極殿に出御する天皇は、朝堂院諸堂に居並んだ貴族・官人たちと、常に同じ空間を共有するにいたったのである。

(2) 平安宮大極殿と蒼龍楼・白虎楼

平安宮の大極殿の左右には、蒼龍楼・白虎楼というふたつの楼閣が築

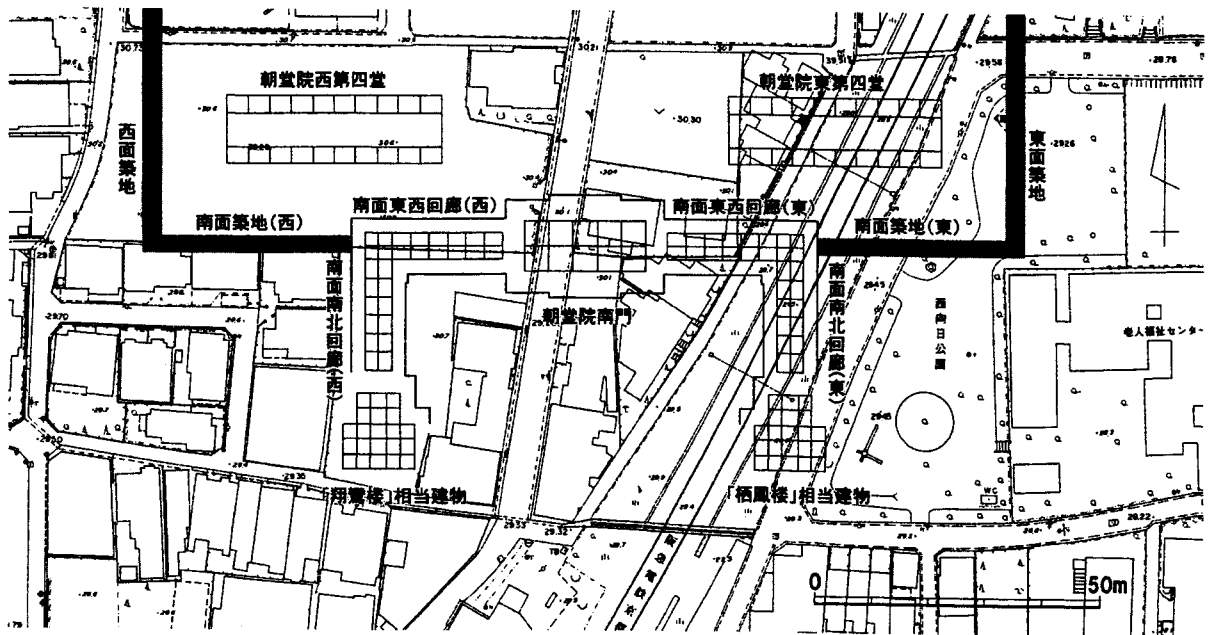


図1 長岡宮朝堂院南門復元図(註2文献に拠る)

かれていた。朝堂院外郭回廊の屈曲部を利用して楼閣としたものであるが、平安宮の場合には大極殿東西の軒廊が朝堂院外郭回廊に取り付いているため、ちょうど大極殿の左右に平面し字形の翼廊が広がり、その先端に楼閣が附設されているような外見を呈することになる。したがって、平安宮大極殿はし字形配置の楼閣附設殿舎に分類しておいてよいだろう。

平安宮大極殿の附属楼閣である蒼龍楼・白虎楼の構造については、いくつかの案を考えることができる。それらを列挙しながら検討を加えることにしよう(図2)。

【第一案】 蒼龍楼・白虎楼の構造を知るための最重要な資料は、平安時代末期に後白河上皇の命によって描かれた『年中行事絵巻』である。この絵巻の原本は江戸時代初期に焼失したけれども、幸いなことに焼失直前の段階に描かれた精密な模本が残されており、それによって原形をうかがうことができる。その巻七「御齋会」に、二ヶ所にわたって大極殿、同軒廊、朝堂院外郭廊、蒼龍楼が描かれているのである(図3)。ここに見る蒼龍楼は朝堂院外郭回廊の屈曲部をそのまま利用し、その屋根の上に楼閣だけ載せたものであり、独立した建造物ではない(図2-1)。この案は『年中行事絵巻』という明確な根拠を持っている点で捨てがたい魅力を持っている。ただ、この図では梁間二間の複廊の屈曲部を利用しているにもかかわらず、そこに附設された蒼龍楼は一辺三間の構造をとっており、これは建築的にはいかにも不自然である。

【第二案】 江戸時代後期にあって平安京研究の集大成をなしとげた固禪入道・藤原(裏松)光世は『大内裏図考證』(巻第三)の中で蒼龍楼・白虎楼をそれぞれ二間四面庇(一辺が四間)とする復元案を提示した(図2-2)。この場合、『年中行事絵巻』の一辺三間という描き方とは齟齬がでてくるけれども、固禪は「年中行事画所図、蓋後世簡略制矣」と推定している。『年中行事絵巻』に描かれた朝堂院は後三条天皇が延久四年

(一〇七二)に再建した第三次のそれであるから、固禪説では平安宮朝堂院が焼亡と再建を繰り返す中で蒼龍楼・白虎楼も設計変更されていたということになる。この案は明治二八年(一八九五)に平安宮朝堂院の一部を縮小復元して建設された平安神宮に採用されており、我々にはなじみが深い(図4)。建築的にも最も見栄えがすることも確かである。『年中行事絵巻』の描写との相違を時代による変化として説明する固禪の意見も傾聴に値する。ただ、一方ではこの案の根拠は固禪の推定だけであり、その点で確証に欠けている感は否めない。

【第三案】 陽明文庫本『宮城図』や九条家本『延喜式 付図』といった現存最古の平安宮指図は、蒼龍楼・白虎楼の基壇の南辺と側辺とは朝堂院外郭回廊の延長線に揃えていながらも、その北東角だけは朝堂院外郭回廊基壇からわずかにはみ出しているように描いている。この描写を重視した上で、『年中行事絵巻』の描写に拠って附属楼閣の一辺を三間と考えて復元したのが図2-2である<sup>6)</sup>。ただ、この場合には朝堂院外郭回廊の屋根をそのまま利用して附属楼閣とする『年中行事絵巻』の描写のような建物にすることは不可能である。この場合、附属楼閣はあくまで独立した建物となり、その一層目の屋根は回廊の屋根のさらに上に覆い被さることになるだろう。ただし、一層目の屋根の内側の辺(蒼龍楼の南辺と西辺、白虎楼の南辺と東辺)が回廊の内側の辺と揃う点で、第二案とは相違することになる。『年中行事絵巻』の描写とやや異なることが気がかりではあるが、現状ではこの第三案に成立の可能性を認めておきたいと思う(図6)。梶川敏夫による平安宮大極殿復元鳥瞰図(図5)には、この案が採用されている。

### (3) 平安宮朝堂院応天門

平安宮朝堂院では、その正門である応天門にも楼閣が附設されていた。東の栖鳳楼(棲鳳楼)と西の翔鸞楼である。これらは、門の左右に延び

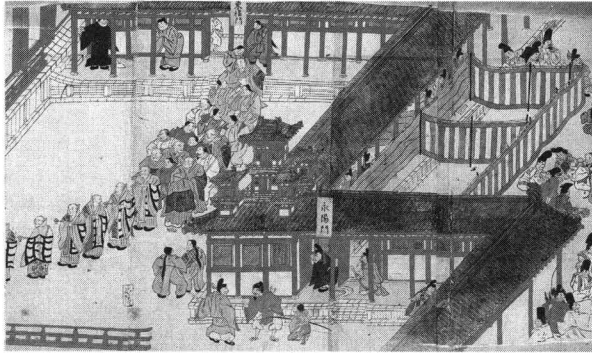


図3 『年中行事絵巻』にみる平安宮蒼龍楼

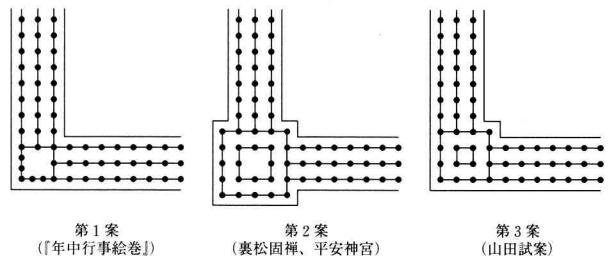


図2 平安宮蒼龍楼復元諸案  
(白虎楼はこれに倣う)(山田作図)

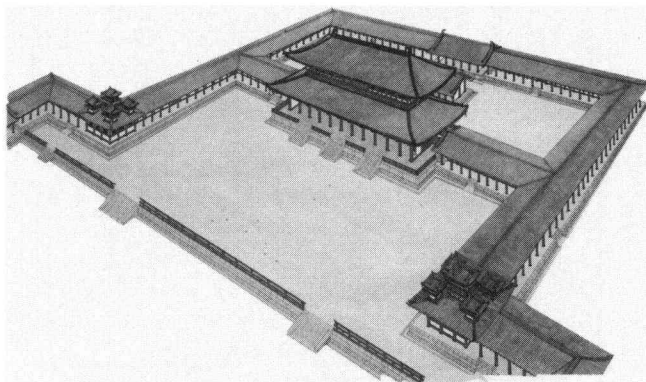


図5 平安宮大極殿・蒼龍楼・白虎楼復元図(梶川敏夫作画)



図4 平安神宮蒼龍楼

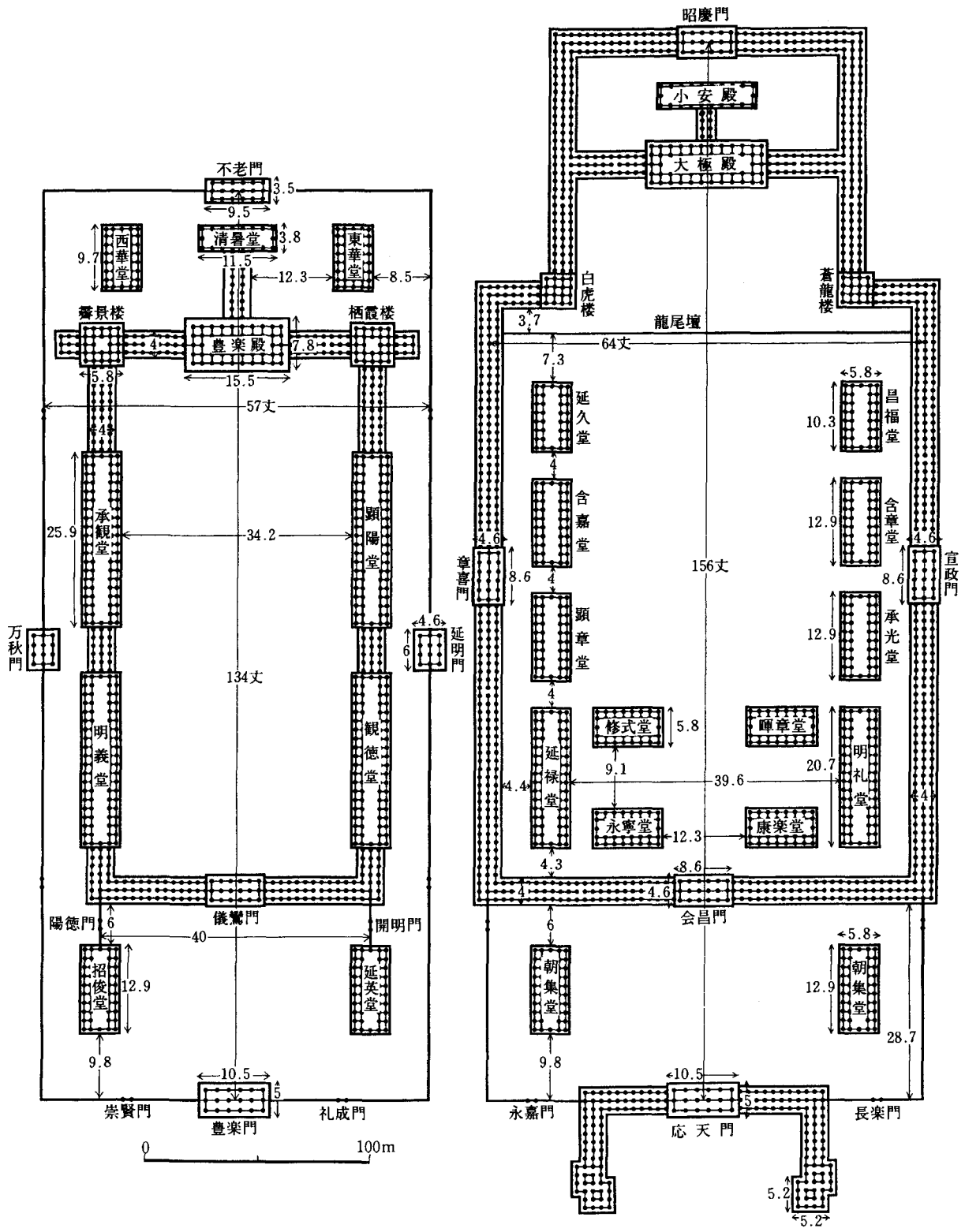


図6 平安宮朝堂院・豊楽院復元図(山田作図)

た翼廊の先端に附設されていたから、応天門はI字形配置の楼閣附設門だということになる。応天門の構造を知る史料は、陽明文庫本『宮城図』や九条家本『延喜式 付図』といった平安宮指図と、『伴大納言絵詞』とがある。後者は、貞観八年（八六六）の「応天門の変」で炎上する同門を描いているが、残念ながら翔鸞楼の屋根の一部が火焰の中にわずかに見えるにとどまり、細部の構造などはよくわからない<sup>(8)</sup>。

なお、明治二八年（一八九五）に出版された湯本文彦の『平安通志』<sup>(9)</sup>は、付図として「大極殿全図」と題した平安宮朝堂院の復元鳥瞰図を載せている。そこでは、応天門の翼廊が重層の閣廊として復元されている。面白い案ではあるが、平安時代の宮殿建築としては突飛にすぎよう。

#### (4) 平安宮豊楽殿と霽景楼・栖霞楼

豊楽院は平安宮朝堂院の東隣に位置し、宴を催すための施設であった。その正殿が豊楽殿である。この建物は東西に軒廊を延ばし、そこに霽景楼（西）と栖霞楼（東）というふたつの楼閣を附設していた。I字形配置の楼閣附設殿舎ということになる。復元するための根拠には乏しいけれども、二間四面の正方形の楼閣と考えておきたい<sup>(10)</sup>。（図6）。

#### (5) 平安京神泉苑乾臨閣

神泉苑は平安宮の南側に存在した離宮である。桓武天皇はこの離宮がことのほか気に入っており、在位中に二七回におよぶ行幸をくりかえしている。太田静六の復元研究<sup>(11)</sup>によると、神泉苑の正殿は乾臨閣と呼ばれた重層の殿堂であり、その左右には軒廊が取り付き、そこに左閣と右閣という楼閣建築が附属していた。また、ふたつの楼閣からはさらに廊が南方に延び、その先端が池に突き出すところに東西の釣台が付けられていたという（図7）。I字形配置と見ることができ、楼閣との関係で見るとI字形配置の楼閣附設殿舎とした方がよいだろう。神泉苑の

事例からは、平安京における楼閣附設建築は平安宮だけではなく、離宮においても採用されていたことが判明する。

## ②その余の都城における類似例

平城宮においては、「第一次大極殿（中央区大極殿）」の大極殿院南門が楼閣附設門の形式を採っている。門の東西の回廊に桁行五間・梁間三間の東西棟建物が附設されており、これが重層の楼閣建築であったと推定されている<sup>(12)</sup>。（図8右）。I字形配置の楼閣附設門である。神亀元年から天平初年頃の平城宮の改築によって付け加えられた建物であったらしい。前述したように、平城宮では天皇が大極殿院南門に立つ「閣門出御型」の儀式がしばしばとりおこなわれたのであり、その舞台となつた大極殿院南門はこうした附属楼閣によって荘厳化されていたのである。

なお、楼閣附設建築に類似するものとして、前期難波宮の内裏南門の左右に造られた八角殿をあげることができる。ここには、内裏南門の左右に回廊で囲まれた方形の区画を設け、その中央に八角殿を配置するという、日本の都城としては他に類を見ない建築が存在するのである<sup>(13)</sup>。（図8左）。この場合には門と八角殿が直接連結されていない点で楼閣附設建築というわけにはいかない。ただ、この八角殿は重層建築であったと推定されており、その点では前期難波宮の内裏南門は、少なくとも外見的には楼閣附設門と類似することになる。本稿の立場からするとこの八角殿をわが古代都城における楼閣附設建築のプレ・タイプと評価することもできないわけではないが、この八角殿をめぐる仏殿説、儒教・道教由来説、鐘楼・鼓楼説、須弥山・耆闍崛山模倣説などのさまざまな説が林立してきた経過<sup>(14)</sup>を考えると、判断に迷う。したがって、今は楼閣附設建築との類似性だけを指摘し、後考に待つことにしたい。

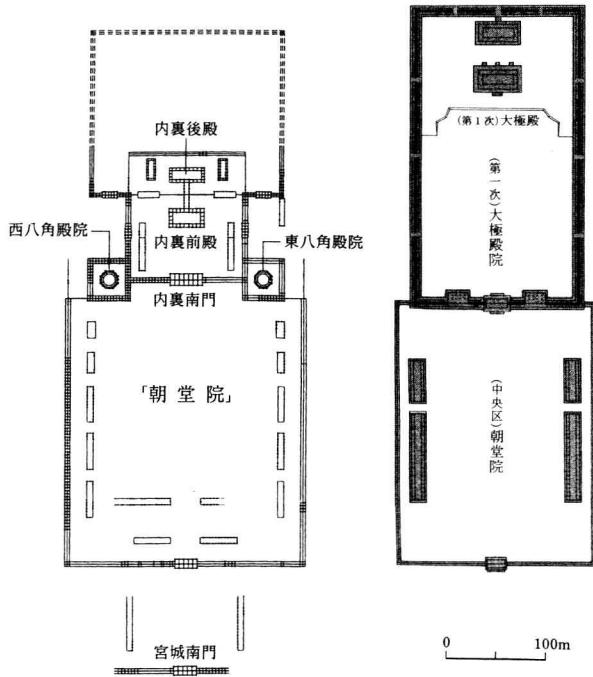


図8 前期難波宮(左)と平城宮第一次大極殿院(右)

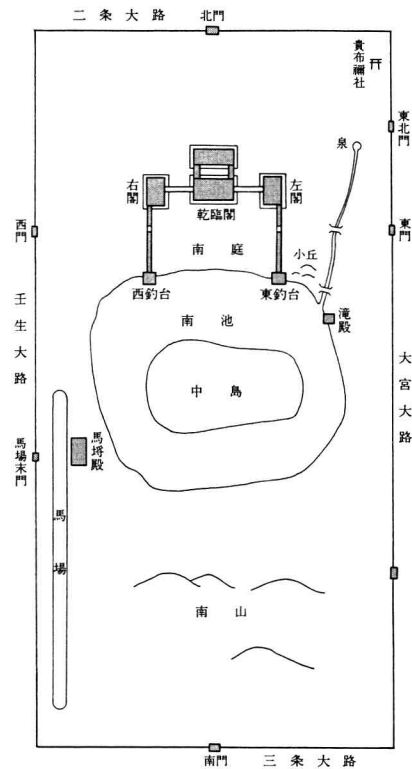


図7 平安京神泉苑復元図(註11文献に拠る)

### ③ 中国都城における楼閣附設建築

#### (1) I字形配置の楼閣附設門の系譜

中国古代の大規模な邸宅においては、その門の左右に一对またはそれ以上の楼閣を附設することがしばしば見られた。これらが「門闕」の用語で呼ばれたことは前述の通りである。こうした建築の風はすでに春秋時代には始まっていたようであるし、漢代にいたってはかなりの普及をみたことが中国各地の漢墓の画像石に描かれた建築図によって知られる<sup>15)</sup>。これは、本稿での用語に従うならば、I字形配置の楼閣附設門に該当することになる。都城を始めとする城郭都市にこうした門闕が採用されていたかどうかは、現在の考古学的知見では確認されていない。ただ、甘肅省麦積山石窟の魏(北魏)代の壁画にはI字形配置の楼閣附設門を持つ城郭都市の風景が描かれており(図9)、この時代にこうした形式の楼閣附設建築が実在したことは充分に考えておかねばならない。

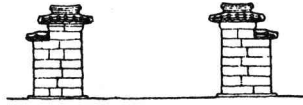
#### (2) L字形配置の楼閣附設門

中国におけるL字形配置の楼閣附設門としては、北京城の紫禁城(故宫、宮城)の正門である午門にその完成形を見ることができる。明・清代の北京城は北側の内城(京城)と南側の外城(天壇・祈年殿などが配置された部分)に大別されていた。都市の中核である内城は、その中央に皇城、さらにその中に紫禁城を置くという三重の構造を基本形としていた<sup>16)</sup>。正門はそれぞれ、外城が永定門、内城が正陽門、皇城が天安門(承天門)、紫禁城が午門である。この午門は、左右に平面L字形の翼廊を延ばし、そこに合計四基の二層楼閣を配置しているのである(図9)<sup>17)</sup>。こうしたL字形配置の楼閣附設門は、明代の南京城の宮城や明代の中都城





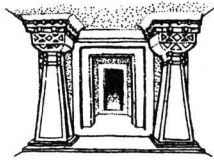
雙關 樓閣形  
四川慶符縣董家碑,漢



雙關 單層有子關  
河南登封關太室闕,漢



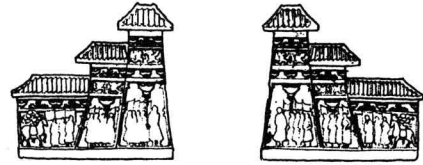
雙關 立於宅前及側面  
山東沂南縣古墓石刻



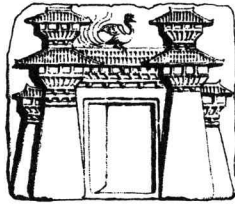
雙關 立於門前方  
四川樂山縣第41號墓基,漢



雙關 立於城門前方  
甘肅天水市麥積山石窟第127窟壁畫,北魏



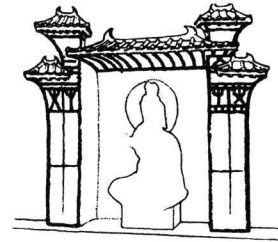
雙關 有子關左右連廊  
唐墓出土石摩



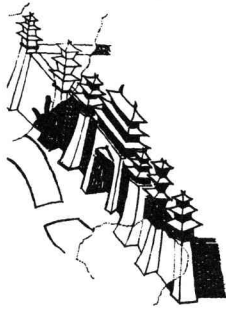
雙關 中央有門  
四川成都市董家碑,漢



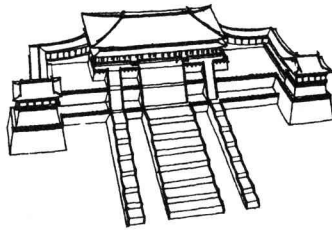
雙關 中央有二層門樓  
山東沂南縣古墓石刻



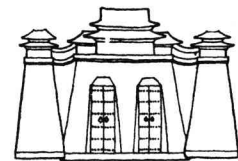
雙關 中央有屋頂  
甘肅敦煌縣莫高窟第275窟,北魏



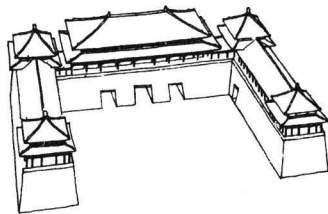
雙關 凸出於城門前(部份復原)  
甘肅天水市麥積山石窟第127窟壁畫,北魏



雙關 凸出於殿前用廊與殿相連  
陝西西安市唐大明宮含元殿  
(據文獻及發掘平面復原)



雙關 凸出於城門前用廊與城牆連接  
河南禹縣石幢,北宋(?)



北京市故宮午門  
兩側凸出用廊與城牆是圓的形式的實例殘餘

圖9 中国における楼閣附設建築(註15文献に拠る)

(現・安徽省鳳陽県城)の大内のそれぞれ正門である午門、元代の大都城(現・北京市)の宮城の正門である崇天門<sup>19)</sup>でもそれぞれ推定されている(図10)。

### (3) 唐洛陽城応天門

中国都城におけるL字形配置の樓閣附設門の源流は、現状の知見で見ると限りでは、隋唐の東都・洛陽城の応天門にまでさかのぼることができる。周知のように洛陽城は外郭城と内城の二重構造を呈しており、外郭城の北西部に内城を置く、「北闕型」の変形ともいえるタイプの都城である。内城は、北端の陶光園・園壁城、中央の宮城、南端の皇城からなっており、それぞれの正門は、外城が定鼎門、皇城が端門、宮城が応天門(則天門)と呼ばれている(図11)。宮城の正門である応天門の遺構は、現在の洛陽市街地の中心道路である定鼎南路によって東西に分断されている。門跡の西半部は一九八〇年に洛陽市文物工作隊によって、また東半部は一九九一年に中国社会科学院考古研究所によってそれぞれ発掘調査された。調査の成果によると応天門は、門の東西に平面L字形の「飛廊」(翼廊)を延ばし、その角の部分に「角樓」を配し、また先端部には「闕樓」を附設するという、ここでいうL字形配置の樓閣附設門の典型的な形態を示している(図12)。それは、『元河南志』が応天門について「左右連闕」と述べている通りである。なお、応天門の遺構の東半部は、現在も洛陽の市街地の中に史跡公園として保存されているし(図13)、また定鼎南路の歩道上には応天門に使われていた礎石が露出しているのを見ることができ(図14)。

洛陽城に応天門(隋代には則天門)が築かれたのは、隋の大業元年(六〇五)のことであった。上述したようなL字形配置の樓閣附設門の建築は、隋代にはすでに都城において採用されていたことを知ることができ(図10)。また、洛陽城においてはいくつも都城の門の遺構が発掘調査されて

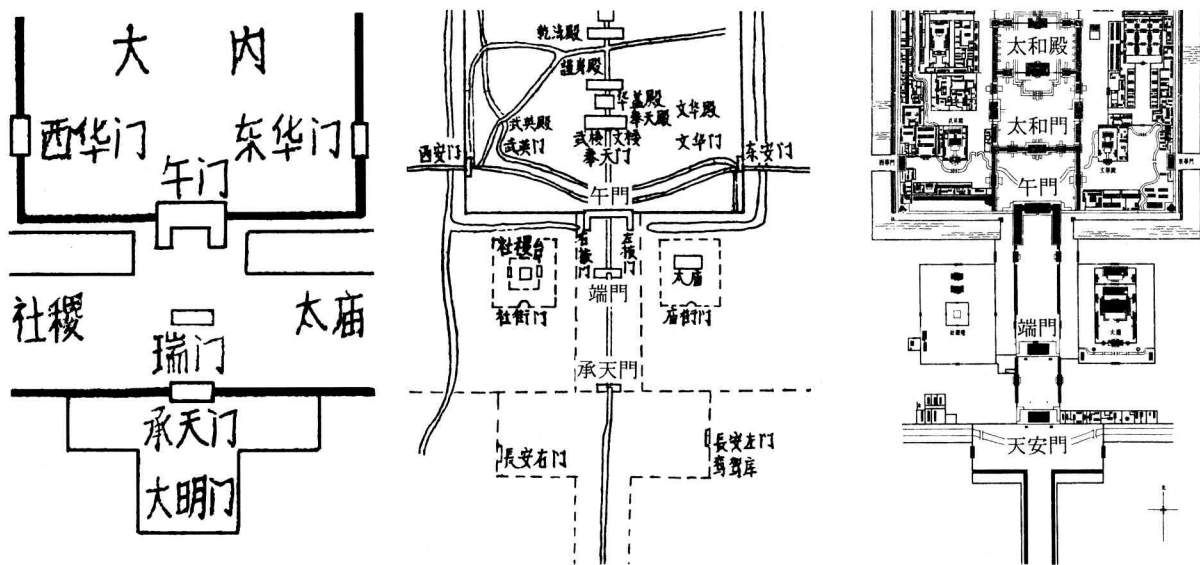


図10 明清時代の宮城の「午門」(左：明南京城、中：明中都城、右：清紫禁城(故宮))

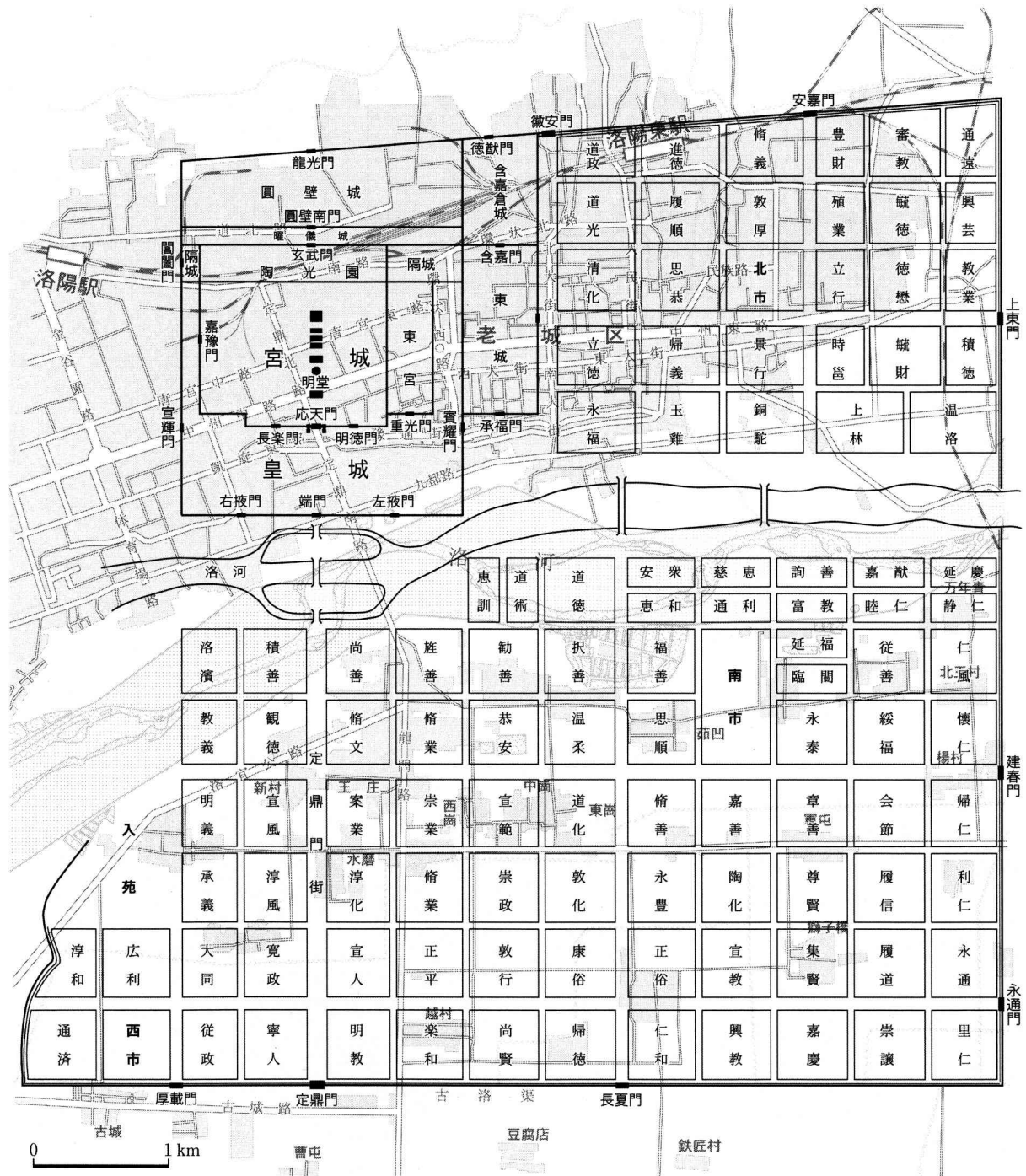


図11 隋唐洛陽城復元図(山田作図)

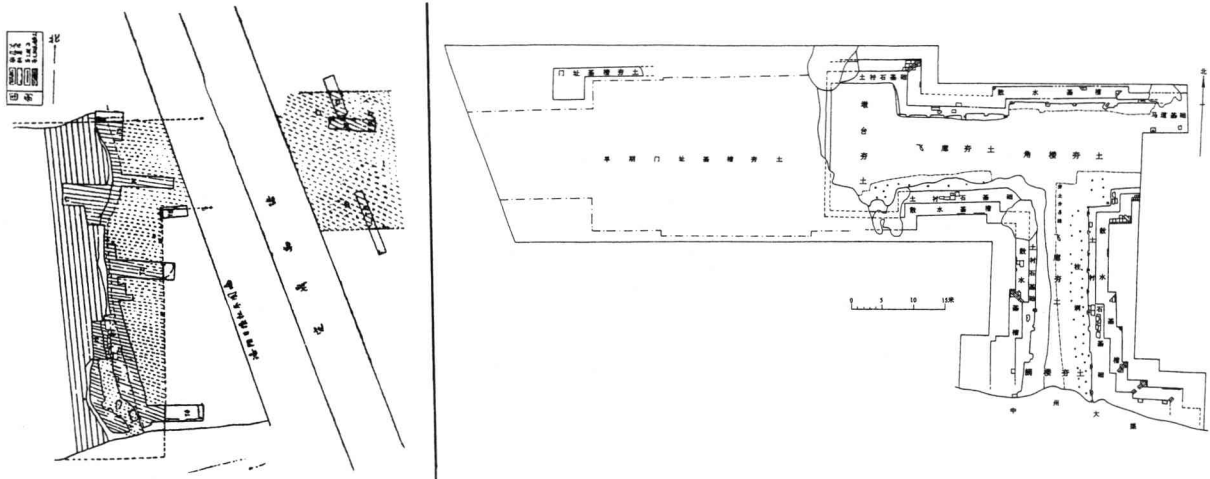


図12 隋唐洛陽城応天門跡(左：西半部(縮尺不明)、右：東半部)



図14 隋唐洛陽城応天門跡の礎石(山田撮影)



図13 隋唐洛陽城応天門跡(山田撮影)

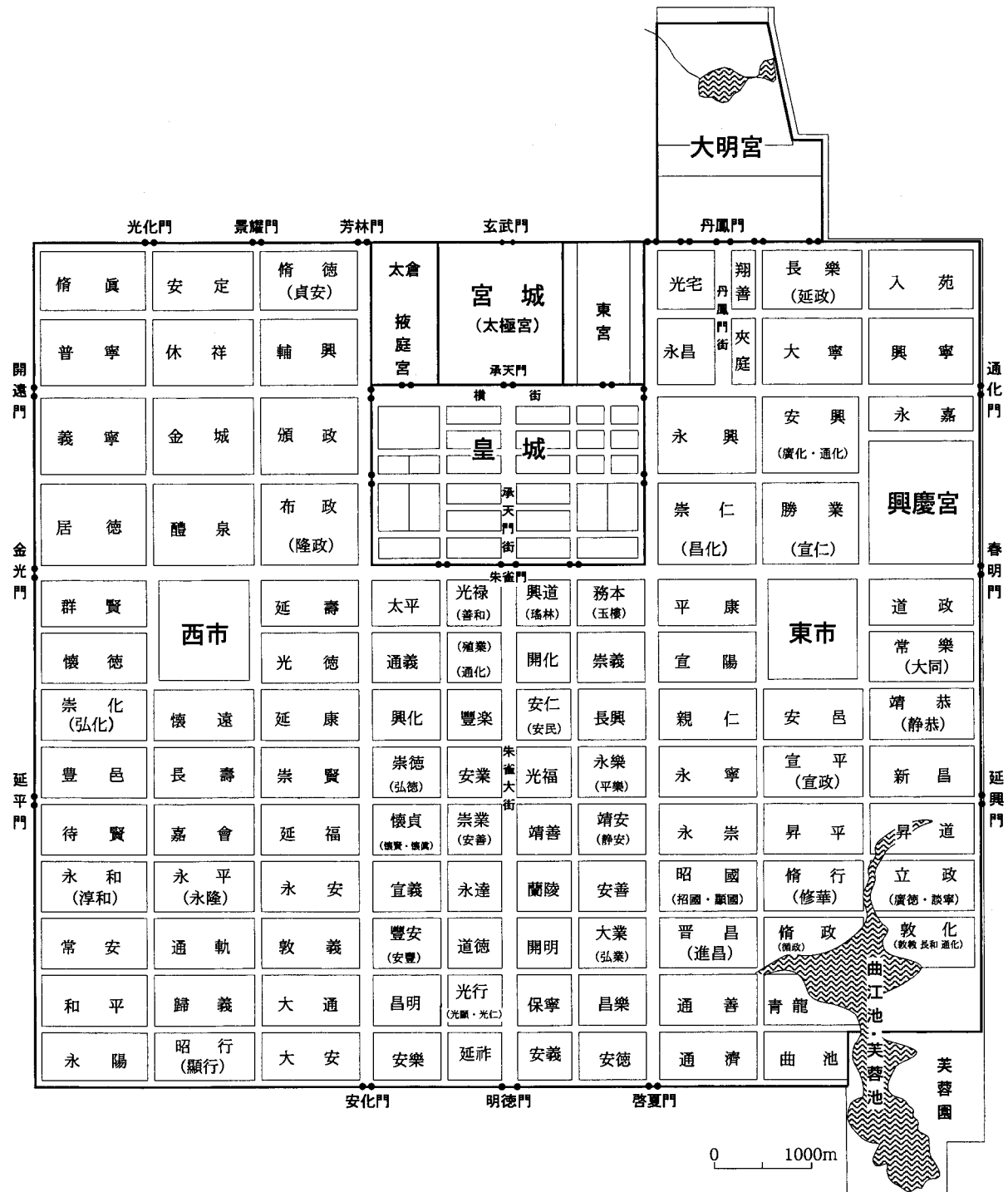


図15 唐長安城復元図(山田作図)

いる——洛陽城外郭城の正門である定鼎門、内城の圓壁城の正門である圓壁南門、内城東城の東門である宣仁門、含嘉倉城の北門である徳獸門、外郭城東壁の南端の永通門など——けれども、樓閣を附設する門は承天門が唯一の例なのである。その点で、隋唐洛陽城において樓閣附設門とは、宮城の正門に限られていたということになる。

#### (4) 樓閣附設門としての唐長安城承天門

隋・唐の事実上の正都であった長安城（隋代には大興城）では、都城の中央北端に内城が置かれ、それがさらに北半部の宮城（太極宮）と南半部の皇城とに分かれていた<sup>(22)</sup>。前者が皇帝およびその家族の居所、後者が官庁街であったことはいまでもない。そしてその両者は、「横街」と呼ばれる幅一五〇mにおよぶ巨大な道路によって隔てられていた。

隋唐長安城においては、これまでに数多くの門の遺構が調査されている。外郭城としては、正門である明德門を始めとして、春明門・延興門・啓夏門・安化門・金光門・延平門など、大明宮としては丹鳳門・玄武門・銀漢門など、皇城としては含光門などがそれである<sup>(23)</sup>。しかし、これらのうちには本稿で問題にしているような樓閣附設門は含まれていないのである。

しかし、だからといって長安城に樓閣附設門が無かったと速断することはできないであろう。結論から述べると、唐長安城の太極宮（宮城）の正門である承天門はL字形配置の樓閣附設門であったと主張したいのである。

承天門は太極宮の南壁に開けられた門であるが、この城壁跡は「西五台」と呼ばれ、現在でも西安市の市街地内にわずかな高まりが一直線に伸びているのを見ることができ（図16）。承天門がこの遺構のラインの東延長線上に載ることはもちろんである。承天門の跡地は現在の蓬湖公

園（図17）の南端部で、同公園内に造られた蓬湖という池の南岸付近にあたっている。一九六〇年代初頭におこなわれた唐長安城の広域調査では、承天門跡の遺構の大部分は公園の造成によって破壊されているが、わずかに残された部分から、この門が三条以上の門道を持っていたことが知られた<sup>(25)</sup>。ただし、この時の調査報告では承天門に附属樓閣が存在したとは考えられておらず、その点では承天門を樓閣附設建築とする私説は成立の余地がないようにも見える。しかし、この広域調査の方法はほとんどがボーリング調査であり、承天門跡についての知見も同じ方法によって得られた結果であったとみられる。そもそも、ボーリング調査は広範囲にわたる遺跡の概略をうかがうためには有効な方法であるけれども、遺跡の細部の把握という点では発掘調査にはとうてい及ばず、常に不確定要素を残すものである。さらに、この調査報告はあまりにも記述が簡略であり、遺跡のどの部分をどのくらいの頻度で探索したかという基礎的情報さえも示されていないのである。したがって、一九六〇年代の調査によって承天門の構造が確定したとはとうてい言えないのである、そこにはまだまだ議論を積み重ねる余地が残されているといわねばならないのである。

承天門の考古学的調査の情報に不確定要素が多いということになると、その復元研究において重要な比較対象としなければならぬのは、唐洛陽城の応天門である。そもそも、唐は事実上の正都長安（西京）の他に洛陽（東都）と太原（北京）をも副都とする複都制を採っており、洛陽や太原にも長安に準じた構造の宮殿を置くことを原則としていた。そこで長安と洛陽の都城の基本構造を比較してみると、

宮城正殿	長安城	洛陽城
	太極殿	含元殿（周（武周）の皇帝・則天の時代には明堂）



図17 西安市蓮湖公園 (唐長安城承天門跡付近) (山田撮影)



図16 隋唐長安城宮城南壁跡 (西五台) (山田撮影)

その点では、承天門が楼閣附設門であったとする私説は十分に成立の余地があると思う。

そもそも、承天門は皇帝の正座である太極宮（宮城）の正門として、他の門とは違った役割が与えられていたものであった。後述するように、承天門は中国の宮廷の区分法である「三朝制」において「外朝」に宛てられていた。『大唐六典』巻七「尚書工部」は「宮城在皇城之北、南面三門、中曰承天、（中略）若元正、冬至、大陳設燕會、赦過宥罪、除舊布新、受萬國朝賀四夷之賓客、則御承天門以聽政」と説いているし、徐松の『唐兩京城坊攷』巻之一もこれを受けて「宮城、亦曰西内、其正牙曰太極殿。城之南面五門、正南承天門。若元正、冬至、陳樂設宴會、赦宥罪、除舊布新、當萬國朝貢使者、四夷賓客、則御承天門以聽政」と述べている。すなわち、承天門においては、正月元旦や冬至の賀、罪人への減刑、罪の赦免、外国使節の謁見などの儀式が皇帝の臨御のもとにおこなわれた

という対応関係が成り立つ。つまり、長安城の承天門は洛陽城の応天門に該当しているのである。これらの門の中で正式な発掘調査がおこなわれている事例として長安城の正門である明德門と洛陽城の正門である定鼎門とを比較すると、前者が五条の門道を持つていたのに対して、後者は三条の門道を持つにすぎなかったことが知られている。すなわち、新都である長安城の建造物が副都である洛陽城のそれに対して優越した格式を保っていたと推測してよいのである。そうすると、洛陽の応天門が楼閣附設門の形態を採っていた以上、長安の承天門はそれと同等かまたはそれ以上の格式のものであったと考えなくてはならないのである。

宮城中門	太極門	—	乾元門
宮城正門	承天門	—	応天門
皇城正門	朱雀門	—	端門
外郭城正門	明德門	—	定鼎門

のである。こうした儀礼用の門はその上部構造として門楼を持っていたから、皇帝はその門楼に出御して儀式を主宰するということになる。<sup>(28)</sup>

承天門の南側には、「横街」と呼ばれる幅一五〇mの広大な道路が東西に貫通していた。佐藤全敏や渡辺信一郎は、承天門の正面の横街には官僚の朝政機関である朝堂が建っていたという重要な事実を明らかにしている。渡辺は「朝堂も、上表・訴訟受理などをつうじて社会との接点の役割を演じた。官僚の宮中朝参・儀礼参加の集合・待機所、六品以下官僚に対する下賜の場、高級官僚任命伝達の間でもあり、皇帝の朝政の場である宮城と官僚が行政を執行する場としての皇城とを結ぶ接点の役割をも果たした。朝堂の機能は、六朝期の公卿議政の場から、皇帝の一元的朝政が全社会へ向かって発出する窓口へと転換したのである。宮城正面の前に朝堂が位置したことは意味がある」と評価している。

つまり、承天門・朝堂そして横街は単なる門や通行路というところにほとんどまらず、皇帝の権威を具現化し、それを社会に発信するための大きな舞台装置だったのである。こうした承天門の位置づけからすると、その構造として私説のように壮大な楼閣附設門を考えることは決して荒唐無稽な憶説に終わるものではないであろう。

### (5) 長安城大明宮の含元殿

長安城太極宮の承天門が門闕であったと考えることによって、よりスムーズに理解することができるのは、長安城に存在したもうひとつの宮殿であった大明宮の構造である。周知のように大明宮は、唐の三代皇帝高宗李治の時代以降は皇帝の実質上の正宮となっており、本来の宮城である太極宮に対して「東内」と別称されていた。

大明宮の正殿は含元殿である。大明宮南半部の低地と中央部の龍首原との間には比高差一〇m余りの段差が東西に通っており、含元殿はこの崖面を利用して築かれていた。含元殿は幅約七五・九m、奥行約四二・

三mの基壇の上に立つ間口一一間、奥行四間の巨大な建築物であったが、それが龍首原の南端の崖面に臨んで建てられたことにより、その偉容はますます際立つことになった。むしろ、この崖面があったことが含元殿をこのような建築にした要因であったと思う。その結果、大明宮に招き入れられた人々は誰もが、はるかに仰ぎ見る含元殿の壮大さに圧倒され、改めて大唐帝国の威信を思い知らされたことになったのである。

含元殿の建築の最も大きな特色は、正殿の東西に平面し字形の翼廊（飛廊）が延び、その角の部分には「角楼」が、またその先端の部分には二基の楼閣が築かれていることである。この楼閣は、東のものが翔鸞閣、西のものが栖鳳閣と呼ばれている。すなわち、含元殿は本稿でいうところのし字形配置の楼閣附設殿舎だったわけである。それまでの中国の宮殿建築において建築物が楼閣を附設するというのはすべて門に限られていた。つまり、含元殿は中国の都城史上はじめての楼閣附設殿舎であった。

含元殿の遺跡の考古学的調査は、一九五九年～六〇年に中国社会科学考古研究所によっておこなわれ、さらに一九九五年から翌年には再度の発掘調査が実施された。第一回目の調査の際の成果では、含元殿の前面には真つ直ぐに延びる三本の長大な龍尾道が復元されていた。しかし、第二回目の調査の後、楊鴻勛は龍尾道の新たな復元案を公表し、学界に衝撃を与えた。<sup>(33)</sup> すなわち、楊の新案では、当初の龍尾道は直線的な二本の斜道であったがその構造は貧弱であったため、咸亨元年（六七〇）に含元殿の東西両閣の基壇側壁に屈曲しながらとりつく様式に改築された、とされたのである。この新説に対しては、彼の研究の方法をめぐって激しい批判が浴びせられた。<sup>(34)</sup> また楊が唐初期段階の龍尾道とした遺構については異論が提出された。すなわち、田中淡がこの遺構を含元殿の前身であった隋代の観徳殿のものであるという見解を提示したし、<sup>(35)</sup> 発掘調査を担当した安家瑤もまた龍尾道は含元殿の建設当初から東西両閣内



側に沿って屈曲する様式のものであったと考えたのである。<sup>(36)</sup>ここで見解が定まらないのは龍尾道の下層遺構の評価であって、唐の盛期の龍尾道については屈曲様式のものであったとする共通見解が得られている。そうすると、安家瑤が論じているとおり、含元殿の南側は「唐の境域が果てしなく統一したものであると表現」する巨大な「殿前広場」であることになる。確かにそれは「殿堂が高く突出し、広場が広いということによって、外朝大典の礼儀の需要を満たすものとなったのである」<sup>(37)</sup>。

含元殿の評価については、傅熹年、田中淡といった研究者によって、それが門としての性格を併せ持った殿舎であるということが論じられている。たとえば田中は、含元殿が門闕のかたちをとどめた建造物であることを指摘し、これは大明宮の正門としての性格と同宮の正殿の前殿としての性格を併せ持っていたことを論じているのである。<sup>(38)</sup>一方、安家瑤は含元殿を門に相当するという説はこの建物の格式を低くしか見ないものであると批判し、含元殿はあくまで大明宮の正殿であり、その最高の建築物であると評価すべきであると主張する。<sup>(39)</sup>ただ、含元殿が門そのものでないことは一見するだけで明らかであり、含元殿が殿舎でないことが主張されているわけではないのであるから、その点では安家瑤の批判はいささか論点がずれているといわざるをえない。

こうした点について論じた吉田欽は、長安城における太極宮承天門と大明宮含元殿の関係について、「本来なら承天門が元日朝賀の場なのに現実には太極殿で行われていたという矛盾が存在した。太極殿で元日朝賀が行われたのは魏晋南北朝の太極殿がやはり元日朝賀の場であったことに影響されたものと思われる。ところが、この矛盾を解決したのが大明宮であった。すなわち承天門に対応する含元殿が元日朝賀の場として使われ、太極殿に対応する宣政殿が本来の常朝・聴政の場として使われるというように、この矛盾を克服している」と指摘している。<sup>(40)</sup>すなわち、含元殿は大明宮の正殿のひとつとして建造されたことは明らかであるけ

れども、そこには洛陽城応天門や長安城承天門の性格の一部が継承されていると見なければならぬのである。含元殿がその左右に翼廊および闕を附設するという、中国の宮殿の殿舎建築としてはきわめて異例の構造を採っているのは、宮城門からの伝統が現れ出たものであるとしか考えられないのである。

#### (6) 「三朝制」と楼閣附設建築

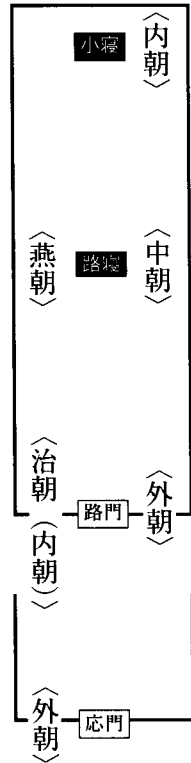
こうした対応関係をより明確にするために、図18に示した「宮城理念比較模式図」を見よう。中国古代においては伝統的に、宮廷を内朝・中朝・外朝に区分する「三朝制」がおこなわれてきた。吉田欽は、同じ三朝制といっても時代によってその認識には変動があるとともに、実際の宮廷の建築物をそのどれに宛てるかという解釈にも違いがあらわれていることをあとづけている。<sup>(41)</sup>吉田によると、『周礼』本文に見られる本来的な三朝制は燕朝・治朝(内朝)・外朝の三つからなるもので、これは「燕治外型三朝制」と概念づけることができる。しかし、後にはこれが変形し、内朝(天子の居住の場)・中朝(聴政の場)・外朝(受朝の場)からなる別の三朝制(「内中外型三朝制」)が派生していったという。唐の時代には内中外型三朝制によっていたというから、これに従って整理すると、

唐洛陽城		唐長安城太極宮		唐長安城大明宮	
内朝	貞觀殿・宣政殿	内朝	貞觀殿・宣政殿	内朝	貞觀殿・宣政殿
中朝	含元殿	中朝	太極殿	中朝	太極殿
外朝	応天門	外朝	承天門・朝堂	外朝	承天門・朝堂
					宣政殿
					含元殿・朝堂

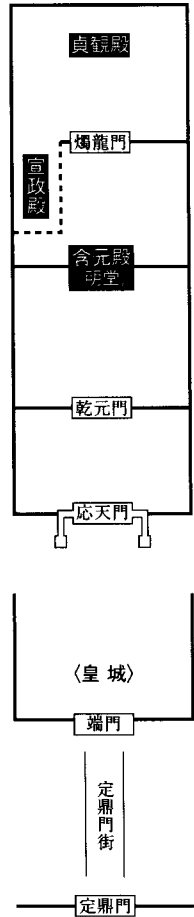
という対応が成り立つことになる。

ここで注目しなければならないのは、外朝に宛てられた建築である。つまり、唐洛陽城の応天門と唐長安城の承天門は楼閣附設門であるか、

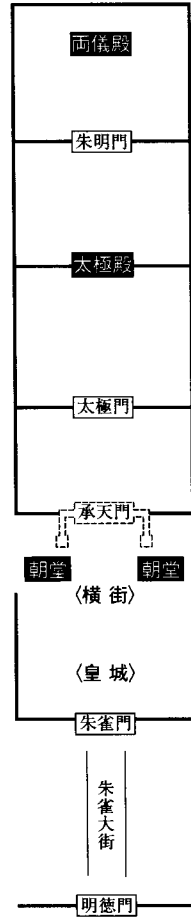
「三朝五門制」  
【燕治外型】 【内中外型】



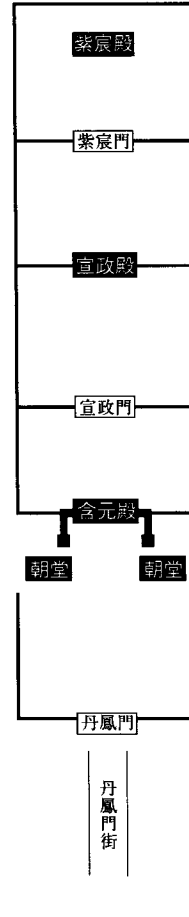
唐洛陽城



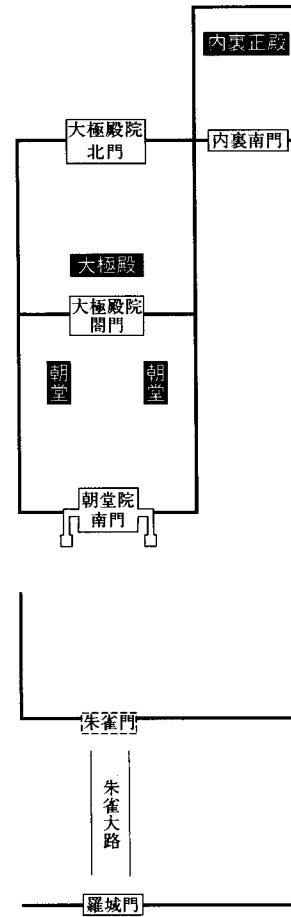
唐長安城太極宮



唐長安城大明宮



長岡宮 (後期)



平安宮

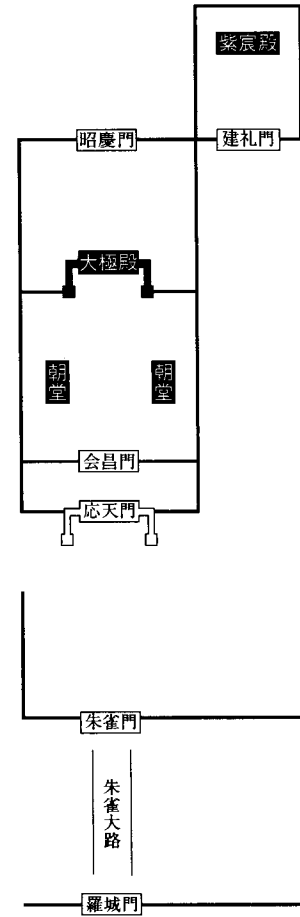


図18 宮城理念比較模式図(「三朝五門制」は吉田欽説に基づく)(山田作図)

またはそう推定されるものであるし、唐長安城大明宮の含元殿は楼閣附設建築であった。すなわち、唐の宮城における楼閣附設建築とは、皇帝が社会に向けて開いた外朝に採用されたものであり、それは通例として宮城の正門であった。ところが、大明宮が築造されるにいたって、それまで宮城正門と宮城正殿との役割分担が再構築されるとともに、大明宮の建てられた龍首原という地形的な有利さを最大限に生かす方策として、宮城正門の役割を継承するとともに宮城正殿の機能も分担するまったく新しい建築物が生み出されるにいたった。これが含元殿だったのである。

#### ④ 桓武朝における楼閣附設建築採用の意義

##### (1) 唐長安城太極宮と長岡宮

以上のように、唐の都城においては、外朝の象徴的な建造物として楼閣附設建築が営まれるという新たな伝統が確立されたのである。しかし、こうしたやりかたが、すぐさま日本の都城に影響を与えたわけではなかった。長岡京より前の都城ではし字形配置の楼閣附設建築が建てられることはまったくなかったし、I字形配置の楼閣附設建築まで視野を広げたとしても、それは前期平城宮の大極殿院（第一次大極殿）の閣門にそのささやかな波及を見るにすぎないのである。

ところが、長岡京造営にあたって、その朝堂院南門はし字形配置の楼閣附設建築として築かれた。こうした建築物が日本の都城においては類例をみない以上、その設計にあたっては唐の都城の影響を考えねばなるまい。しかも、唐長安城大明宮では含元殿という宮城の正殿がし字形配置の楼閣附設建築であったのに対して、長岡宮大極殿は楼閣附設建築ではなかった。すなわち、長岡宮の朝堂院南門を楼閣附設建築とするに際

してその模範とされたものは、当時の唐皇帝の事実上の正宮であった大明宮ではなかったのである。そうすると、その原型は長安城太極宮か洛陽城宮城のどちらかに求めなければならないことになるし、可能性としてはもともとの唐皇帝の正宮であった前者を第一の候補としてあげておくべきであろう。

桓武天皇がどこからこのような着想を得たのか、またどんな理想のもとにこうした唐突とも見えるような宮城の設計を採用したのか、それはまったくわからない。しかし、あえて憶測を加えることは可能である。

日本の都城は中国の都城からの影響を受けながらも独自の発達をとげてきた。広大な朝堂院を宮城の中心に据えたことなどは、中国には見られない日本独自の特色であり、大極殿と朝堂院は中国流にいう聴政の場としての「中朝」として整備されていた。さらに、「内朝」にあたる内裏は、前期平城宮や後期難波宮の段階において朝堂院と切り離されることによって独自の地位を確立するにいたっていた。しかし、天子と社会との結節点にあたる「外朝」は、日本の都城においてはまったく未発達のままだったのである。そして、日本的な都城に「外朝」を付加しようとするならば、それは宮城正門を楼閣附設建築とすること以外にはないであろう。すなわち、桓武天皇が長岡宮朝堂院南門を楼閣附設建築として構想したのは、単にそれが長安城承天門や洛陽城応天門に見られたというだけではない。桓武天皇は自らの新都の建設にあたって、その構造に本来的な都城の理想を付加することを要求したのではなからうか。すなわち、長岡宮朝堂院南門があえて楼閣附設建築という形態を採ったのは、それが中国都城の理想形としての「三朝制」のシンボルと認識された結果であると考えるのである。

今後の研究に向けた見通しとして、さらなる憶測を重ねることを許していただくことにしよう。桓武天皇が長岡宮の建設にあたって中国的な都城の理想を思い描いていたとするならば、朝堂院南門だけではなくそ

他の部分にもその影響があらわれている可能性を考えておかねばならない。たとえば、長岡宮朝堂院南門の南側を東西に貫く二条大路を見てみよう。現行の長岡京復元案に拠ると長岡宮朝堂院の南側はそのまま二条大路に接しており、そうすると今回明らかになった朝堂院南門の附設楼閣は二条大路の路面に突き出していたとみなざるをえない。これは、わが国の都城としては明らかに異例な景観である。しかし、長岡宮朝堂院南門が唐長安城承天門に倣ったと考えるならば、長岡宮の前面の二条大路は唐長安城の「横街」に対応することになり、ここに朝堂院南門の翼廊と楼閣が突き出すことはむしろ自然なことになるだろう。そして、この仮説が正しいとすると、長岡宮前面の二条大路は単なる通行路にとどまらず、長安の横街に準ずる特別の意義が与えられていた可能性までもが見えてくることになる。さらに、そこまで想像を広げるならば、長岡京の「宮城南面街区」の北端の街区について、唐長安城の皇城に範を採ったような特別区画として設計されていた可能性を考慮せねばならないと思う。

## (2) 唐長安城大明宮含元殿と平安宮

桓武天皇は長岡京の一〇年間の後、延暦一三年(七九四)一〇月二八日に平安京に再度の遷都をおこなった。平安宮の構造の中で注目できるのは、朝堂院正門である応天門だけにとどまらず、朝堂院の正殿である大極殿が楼閣附設建築として造営されたことである。およそ、宮殿の殿舎を楼閣附設建築とすることは、それまでのわが国の都城はもろろん古代中国においても、唐長安城の大明宮含元殿以外には見られないことであつた。すなわち、楼閣附設建築の源流という一点に論を絞るならば、平安宮大極殿の設計の原型となつたものは大明宮含元殿のほかにはありえない。桓武天皇は長岡京の時には唐長安城太極宮に範を求めたのであつたが、平安宮の造営にあつたのはそこにさらに大明宮の要素を付加

しようとした、ということになる。

長岡宮から平安宮に移るに際して採用されたもうひとつの変更点として、前者では大極殿が朝堂院と隔絶して大極殿院という独立区画を持つていたのに対して、後者の大極殿は朝堂院に対して開放されている、ということがあげられる。太極宮の太極殿にしても大明宮の宣政殿にしても、唐長安城における「中朝」の建築は宮城の中央に独立区画を有するものであつた。それに対して、「外朝」の役割を持つ含元殿は外部に対して開放されていた。ここにもまた、平安宮の設計に対して大明宮の構造が影響を与えた点を見いだすことができるのである。平安宮大極殿が楼閣附設建築となつたことこそは、新しい都が唐大明宮のイメージの投影であつたことのシンボルだつたといわなければならないまい。

しかしその一方で、大明宮含元殿の建築様式である楼閣附設建築とは、それが「外朝」に宛てられていたからこそ意味を持つものであつた。平安宮全体の正殿である大極殿にその様式を採用したとしても、それは大明宮含元殿の外面的な模倣にとどまり、本来の意味づけからはかなり離れてしまうものにならざるをえないのである。そもそも、長岡宮朝堂院南門や平安宮応天門を都城の理想形の「外朝」になぞらえたということすら、どれほど実態を伴っていたかは疑問である。平城宮の時代には天皇が大極殿院閣門に出御することがあつたが、桓武天皇が長岡宮の朝堂院南門や平安宮の応天門の楼上に出御したという事例を見いだすことはできないからである。ましてや、平安宮大極殿に附設された蒼龍楼と白虎楼にいたつては実効性のある使われ方がなされた形跡はまったくなく、それは単なる装飾だつたとしか考えられないのである。

その意味では、桓武天皇の壮大な実験も結局は空回りに終わったと見ることもできないわけではないが、私見ではそれはいささか一面的な評価であると思う。日本の古代都城が中国都城を理想とし続けていたことは疑いのない事実ではあつたが、しかしその基本的な構造は日本の実状

に合わせた独自のものであった。古代の日本人は必要とあらば中国都城の理想や構造を換骨奪胎することも厭うことはなかったのである。桓武天皇にしても、長岡京や平安京の造営にあたって中国の都城をそのまま模倣したり、またはその忠実なミニチュアを造ることを第一義にしたとは考えがたい。むしろ、中国の都城の理想と現実の中から、採るべきものは採り、捨てるべきものは捨てて、より日本的な理想の都城を追究するというところこそ、桓武天皇の意図に近いものだったのでなかろうか。すなわちそこでは、中国の都城に見られる諸要素はバラバラに分解され、取捨選択されながら、日本的な構造のもとに再構築されていったのである。その点では、長岡京や平安京における楼閣附設建築とは、桓武天皇によって創出された、新しい都を象徴する存在であったという評価を加えることができるのである。

平安時代中期・後期には、仏教寺院において楼閣が幅広く採用されることになる。<sup>(13)</sup>たとえば、関白藤原頼通は極楽浄土の優美な姿を現世に再現せんとして、左右に翼廊を延ばしてそこに角楼を附設した宇治・平等院鳳凰堂を建立した。白河法皇の法勝寺、それを模倣した奥州藤原氏の平泉・毛越寺などの密教寺院もまた、金堂の左右に平面L字形の翼廊を付け、その先端には重層の鐘楼・鼓楼や経蔵を配置し、楼閣附設建築を彷彿とさせる様式を採っている。もちろん、これらの寺院建築は宮殿とはまったくその意味を異にしていたものであり、両者を同列に論じることはできない。しかし、もし、国家のシンボルたる平安宮大極殿が楼閣附設建築という様式を採らなかつたら、こうした寺院建築もまったく別の姿で現れ出たのではなかろうか。その意味では、桓武天皇の創り上げた日本的な楼閣附設建築は、その後いたるまで多大な影響を与え続けたといわねばならないのである。

註

- (1) 中島信親「長岡宮跡第四三七次(7 ANEYTY—1—2地区)―朝堂院南面回廊、乙訓郡衙跡―発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七二集「長岡京跡ほか」所収、向日、向日市教育委員会、二〇〇六年)。
- (2) 松崎俊郎「長岡宮跡第四四三次(7 ANFMK—1—2地区)―朝堂院南面回廊「翔鸞楼」、乙訓郡衙跡、山畑古墳群―発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七二集「長岡京跡ほか」所収、向日、向日市教育委員会、二〇〇六年)。
- (3) 同遺跡の実査と検討については、向日市埋蔵文化財調査センターの國下多美樹・松崎俊郎・中島信親各氏の御配慮を賜ることができた。記して謝意を表したい。
- (4) 林巳奈夫編「漢代の文物」(京都、京都大学物科学研究所、一九七六年)。
- (5) 福山敏男「朝堂院概説」(『大極殿の研究』所収、京都、平安神宮、一九五五年)。
- (6) 橋本義則「平安宮成立史の研究」(東京、塙書房、一九九五年)。
- (7) 寺升初代「平安宮の復元」(『平安京提要』所収、東京、角川書店、一九九四年)。
- (8) 梶川敏夫の復元図は各種の書物に掲載されているが、その一例をあげておく。京都市企画、村井康彦編「よみがえる平安京」(京都、淡交社、一九九五年)、二五頁。
- (9) 松崎俊郎は「伴大納言絵詞」に描かれた平安宮応天門翔鸞楼を、東西方向の棟と南北方向の棟とが組み合わさった、平面「凸」字形の構造であると解析している。松崎、註2前掲論文。
- (10) 京都市参事会編、角田文衛解説「平安通志」(復刻版)(東京、新人物往来社、一九七七年)。
- (11) 寺升、註6前掲論文。
- (12) 太田静六「寝殿造の研究」(東京、吉川弘文館、一九八七年)。
- (13) 奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XI「第一次大極殿地域の調査」(奈良国立文化財研究所学報第四〇冊、奈良、同研究所、一九八一年)。
- (14) 大阪市文化財協会編「難波宮址の研究」第二三(大阪、同協会、二〇〇五年)。
- (15) 古市晃「孝徳朝難波宮と仏教世界―前期難波宮内裏八角殿院を中心に―」(『大阪における都市の発展と構造』所収、東京、山川出版社、二〇〇四年)。中尾芳治「難波宮の研究」(東京、吉川弘文館、一九九五年)。
- (16) 董鑿泓編「中国城市建设發展史」(台北、明文書局、一九八四年)。
- (17) 村田治郎「中国の帝都」(京都、綜芸舎、一九八一年)。
- (18) 叶曉軍編「中国都城歴史図録」第三集(蘭州、蘭州大学出版社、一九八七年)。

- (19) 董編、註15前掲書。
- (20) 洛陽市文物工作隊(朱亮執筆)「隋唐東都応天門遺址発掘簡報」(《中原文物》一九八八年第三期掲載、鄭州、一九八八年)。
- (21) 楊育彬・袁広闊編「二〇世紀河南考古發現与研究」(鄭州、中州古籍出版、一九九七年)。なお、この調査の図面は、奈良文化財研究所編「日中古代都城図録」(東京、クバプロ、二〇〇二年)、一七六頁で見ることができる。
- (22) 図一五の唐長安城復元図は、かつて京都文化博物館編「大唐長安展」(京都、同博物館、一九九四年)に掲載したものを修正したものである。この長安城復元図が従来のもので異なっている点のひとつは、中国側研究者の新しい成果(中国美術全集編輯委員会編「中国美術全集」建築藝術編三 園林建築(北京、新華書店北京發行所、一九八八年)を参照し、都城の東南端に曲江池と芙蓉池というふたつの池が連接していると考えたところである。田中淡「権力と宗教の都—宮殿・仏寺・苑園」(《長安—絢爛たる唐の都》所収、東京、角川書店、一九九六年)参照。
- (23) 陝西省文物管理委員会「唐長安城地基的初步探測」(《考古学報》一九五八年第三期 掲載、北京、一九五八年)。
- (24) 「西五台」(長安城宮城の南城壁跡)は、現在の西安市蓮湖区に所在する。蓬湖路の南に東西に延びる狭い生活道路の南側が五〇cm—1m程度高まっており、これが四〇〇mほどにわたって続いている(一九九三年踏査)。その場所は、西安城玉祥門の東南方、洒金桥小学校の西方、ホテル「古都文化芸術大廈」の南側である。
- (25) 中国科学院考古研究所西安唐城発掘隊「唐代長安城考古紀略」(《考古》一九六三年第一期掲載、北京、一九六三年)。
- (26) 中国科学院考古研究所西安工作隊「唐代長安城明德門遺址発掘簡報」(《考古》一九七四年第一期掲載、北京、一九七四年)。
- (27) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊・洛陽市文物工作隊「定鼎門遺址発掘報告」(《考古学報》二〇〇四年第一期掲載、北京、二〇〇四年)。
- (28) 徐松(愛宕元訳注)「唐兩京城坊攷—長安と洛陽」(東京、平凡社、一九九四年)、一一一頁。
- (29) 佐藤全敏「唐の朝廷について」(《難波宮と日本古代国家》所収、東京、塙書房、一九七七年)。
- (30) 渡辺信一郎「天空の玉座—中国古代帝国の朝政と儀礼」(東京、柏書房、一九九六年)。
- (31) 中国科学院考古研究所編「唐長安大明宮」(中国田野考古報告集專刊丁種一—号、北京、科学出版社、一九五九年)。郭義孚「含元殿外観復元」(《考古》一九六三年第一〇期掲載、北京、一九六三年)。
- (32) 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊「唐大明宮含元殿遺址一九九五—一九九六年発掘報告」(《考古学報》一九九七年第三期掲載、北京、一九九七年)。
- (33) 楊鴻勛(田中淡・福田美穂訳)「唐長安大明宮含元殿の復元的研究」(《佛教芸術》第二三三三号掲載、東京・大阪・名古屋・北九州、一九九七年)。
- (34) 安家瑤(町田章訳)「含元殿遺跡の発掘に関する誤認を解く」(《佛教芸術》第二三八号掲載、東京・大阪・名古屋・北九州、一九九八年)。
- (35) 田中淡「楊鴻勛「唐長安大明宮含元殿の復元的研究」訳者解題」(《佛教芸術》第二三三三号掲載、東京・大阪・名古屋・北九州、一九九七年)。
- (36) 安家瑤「唐大明宮含元殿跡の再発掘と再検討」(《東アジアの古代都城》所収、奈良、奈良文化財研究所、二〇〇三年)。
- (37) 安、註36前掲論文。
- (38) 田中、註22前掲論文。
- (39) 安、註36前掲論文。
- (40) 吉田歙「日中宮城の比較研究」(東京、吉川弘文館、二〇〇二年)、一一四頁。
- (41) 吉田、註40前掲書。
- (42) 長岡宮左右兩京のそれぞれ三条一坊一・二・七・十・十五・十六町にあたる一六町を指す。これは、長岡宮後期造営の際に宮城に取り込まれたと山中章が推定している部分である。山中章「長岡宮研究序説」(東京、塙書房、二〇〇一年)、六七—七〇頁。
- (43) 太田、註11前掲書。

(花園大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇〇六年五月三十一日受理、二〇〇六年八月一〇日審査終了)

---

## The Addition of “Rokaku” Structures during the Kammu Era

YAMADA Kunikazu

In the Heian palace built by Emperor Kammu there were corridors called “yokuro” extending from the right and left of the palace and gates, and it was not uncommon for structures called “rokaku” to be built at the end of these corridors. Some examples are the Daigokuden which serves as the main Chodo-in, the Outenmon at the southern gate of the Chodo-in and the Burakuden, the main building of the Buraku-in. A recent investigation has revealed that at the Nagaoka palace too, yokuro and rokaku were added at the southern gate of the Chodo-in. This paper examines the significance of these structures.

In China, rokaku structures were built in the walled cities of the Sui and Tang dynasties. Two examples are the Yingtianmen which serves as the front gate to the Luoyang palace and the Hanyuandian which is the main building of the Damingong of the Chang’an palace. The Chengtianmen at the front gate of the imperial palace at Chang’an is also thought to have been built in the same style. These additional rokaku structures in Sui and Tang walled cities were used as places where the emperor came into contact with outside society. We may conclude, therefore, that Emperor Kammu built these additional rokaku structures at the Nagaoka and Heian palaces by incorporating such elements from walled Chinese cities.